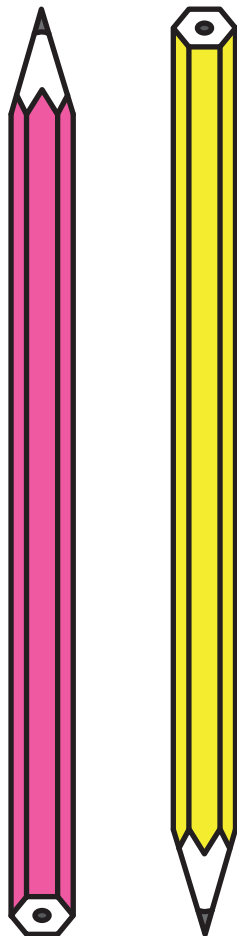


新版 だれも教えなかった

レポート・ 論文 書き分け術

麗澤大学名誉教授
元産経新聞論説副委員長

大竹 秀一 著



目的が違えば書き方も違う！

コツは、**主観文**と**客観文**の
書き分けにある！

SCC

新版 だれも教えなかった

レポート・ 論文 書き分け術

麗澤大学名誉教授
元産経新聞論説副委員長

大竹 秀一 著

はじめに

文章を書くのが苦手だと思っている若い人たちのために、いささかでもお役に立てればと思って、拙著「だれも教えなかったレポート・論文書き分け術」を初めて世に出したのは2005年（平成17年）。それから12年が過ぎた。麗澤大学での14年におよぶ作文教育を土台に、私なりに工夫して作った本のもりだったが、幸い若い読者の支持を得て、今日まで版を重ねてきた。しかし12年もたつと、さすがに本の内容や叙述の仕方などに、時代に合わないところが散見されるようになったので、出版元のおすすりめもあり、思い切った改変を施すことにした。そしてでき上がったのがこの新版である。旧版の古い文例や参考資料の多くを新しいものと入れ替え、叙述の用語、言葉使い、本の装幀^{※1}なども時代に沿った、若い人々に親しまれるものにしたつもりである。

想定している読者層が、高校を卒業して大学や短大、専門学校などに在学中の人たち、あるいは就職してまだ実務経験の比較的浅い人々、であることは旧版と変わらない。

題名の中の「書き分け術」という言葉には二つの意味がある。一つは、「主観的文章（主観文）」と「客観的文章（客観文）」という文章の2分類を提唱していること、もう一つはレポート、論文それぞれが1種類のものではなく、現実にはいくつかの違った種類に分類できることを示したことである。これは私のジャーナリストとしての経験と大学での教職の経験から引き出したもので、類書には見当たらないことであろう。くわしいことは本書を読んでいただきたい。

大竹秀一

※1 そうてい:本の体裁、内容を含めたデザインのこと。装丁・装訂・装釘とも書く。

本書の構成

第1章では、その苦手意識がどこから来るのか、また具体的に文章書きのどこが難しいのかを分析した。文章が書けないというと、才能がないせいだとか、努力しないからだとか言われそうだが、必ずしもそうとは限らない。活字離れの風潮が進む一方で、学校では作文教育が不当に、といてよほど軽んじられているように見える。大学ではレポートや論文の書き方を教えずに、書くことを要求しているのが大方の現状ではないか。だから、書けないと嘆く人は、この章を読んで何もかも自分のせいではないことを理解し、少しは気を楽に持ってほしい。

第2章では、文章を書く前のトレーニングとして、文章を主観的文章と客観的文章に分け、その性質の違いを説明した。こういう分類は私が勝手にやったことで、一般にはなじみがないことである。しかし私は大学での論文やレポートとか、職場の実務レポートなど事実を重んじる文章を書く上で、この区別は大変重要であり、また役に立つと信じている。

さらに世の中の文章を主観、客観の度合いによって四種類に分けてみた。これによって自分の書こうとする文章がどういう種類の文章か、広い文章の世界の中でどこに位置しているかを理解することは、無駄ではないと思う。

第3章と第4章ではレポートとその書き方を取り上げた。まず視野を広げて、実社会のレポートについて実例などを見たあと、学生のレポートを四種類に分けて書き方を述べた。これまでに刊行されているレポート書きの手引書は、一種類のレポートの書き方を述べているのが普通だが、これは日本の大学の実態に合っていない。書いて出すものはすべてレポートと呼んでいる実態をよく見て、整理分類したつもりである。

第5章、第6章は論文について書いている。ここで私はいわゆる研究論文と、意見論文という二分法を提案しているが、これも一般にはなじみのない分け方だと言われるかもしれない。しかし主観的文章、客観的文章という基本的な考え方に立てば理解していただけるものと思う。私は、研究論文の書き方は大学教育の基本に置かれるべきだと考えているが、日本の大学ではこの点の認識がきわめて薄い。欧米先進国のアカデミック・ライティングを見習った作文教育が必要である。卒業論文の書き方にはそういう意味も込めてある。意見論文の書き方については、次の第7章も併せて参考にさせていただきたい。

第7章は、文章を書く上での作法やさまざまな技法を取り上げた。客観性を重んじた、手続きの厳密な研究論文やそれに類するレポートの書き方は、大学生にとって大切なものだが、卒業後は学究の道に進む人を除いてほとんど用がなくなる。実社会に通用しているのはいわゆるノン・アカデミックな文章である。こういう主観の混じった文章は自由度が高く、書き方も多彩になる。第7章はそういう文章への対処法と考えていただきたい。ここは「文章書きの難しいところ」に関する学生のアンケート調査（第1章第3節）に応じて書いたものである。一部、内容の重複するところがあるのはお許しいただきたい。

第8章では、文章を書く上でどういうところを間違えやすいか、実例を挙げて指摘し、訂正例を示した。間違い文例や語句の誤用例のほとんどは、学生が作文の時間に書いたものを参考にした。

付録では、OL やビジネスマンの人たちが日常の業務の中で書く文章について、書き方の心得というべきものを述べた。基本的なことばかりだが、参考にさせていただければ幸いである。

目次

はじめに
本書の構成**第1章 文章を書くことが苦手な人に**

第1節	なぜ苦手か ……………	1
	学生たちの嘆き……………	1
第2節	その理由は ……………	3
	深刻化する活字離れ……………	3
	学校で教えてくれない……………	4
第3節	どこが苦手か ……………	6
	アンケートの回答……………	6
	レポート・論文 —アカデミックな文章……………	7
	社会の文章 —ノン・アカデミックな文章……………	8

第2章 文章の分類 — 主観的文章と客観的文章

第1節	富士山の書き方 ……………	11
第2節	主観文・客観文の転換と主観客観混交文 ……………	17
第3節	文章の四分類 ……………	20
	小説・詩歌……………	21
	随筆・紀行・手紙……………	22
	評論・ルポルタージュ……………	24
	ニュース記事・研究論文……………	26

第3章 レポートとは何か

第1節 社会のレポート……………29

ジャーナリズムのレポート……………29

ビジネス・官公庁のレポート……………33

第2節 学生のレポート……………37

1. 調査研究レポート……………37

2. 意見レポート……………39

3. 読書レポート……………40

4. 学習レポート……………41

5. どのレポートを書いているか……………42

第4章 学生のレポートの書き方

第1節 調査研究レポートの書き方……………45

レポートの性格……………45

テーマをしぼる……………46

資料を探し集める……………46

比較・分析・考察……………50

フローチャート……………51

レポートの構成・形式……………52

草稿を書く……………55

調査研究レポートの文章……………56

第2節 意見レポートの書き方……………60

レポートの性格……………60

E S S A Yの書き方に学ぶ……………61

構成要素と材料……………62

材料を調える……………63

論じる	64
意見レポートの形式	65
意見レポートの文章	66
第3節 読書レポートの書き方	69
出題のねらい	69
書き方の方針と攻略法	69
形式とスタイル	72
第4節 学習レポートの書き方	79
出題のねらいと範囲	79
書き方の方針と攻略法	80
形式とスタイル	82
講義を超えて書くべきか	83

第5章 論文とは何か

第1節 論文いろいろ	85
第2節 研究論文	89
第3節 意見論文	91

第6章 論文の書き方

第1節 卒業論文の書き方	93
テーマを設定する	94
資料の収集・整理・保存	95
資料の吟味と論理的考察	96
論文の構成	97
卒業論文の文章	99

第2節 意見論文の書き方…………… 106

研究論文のスタイルを頭に置け…………… 106

時系列で攻略せよ…………… 107

分割して書け…………… 108

具体と抽象の使い分けを…………… 109

第3節 ぶっつけ本番の論作文—試験場、教室で…………… 111**第7章 ここが難しい — 書き方のこつ****第1節 論理的に筋道の通った文章**…………… 115

手本は研究論文・調査研究レポート…………… 115

首尾一貫せよ…………… 116

複雑・難解になるな…………… 117

文章は一本道で…………… 118

第2節 説得力のある文章…………… 119

にわか専門家になれ…………… 119

データの裏付け…………… 120

経験の裏打ち…………… 120

説得への熱意…………… 120

第3節 レトリック（修辞）など文章の表現力…………… 122

現代の名文とは…………… 122

わたし読む人…………… 123

わたし書く人…………… 124

わたし見る人…………… 125

第4節 書き出し…………… 126

序論を手本に…………… 126

疑問文で始める…………… 127

結論先行…………… 128

論敵を引き合いに……………	128
エピソードから……………	130
背景説明から……………	130
第5節 締めくくり……………	132
強調点の反復……………	132
慣用句、ことわざの応用……………	132
意思表示……………	133
感懐吐露……………	133
第6節 長い文章こわくない……………	135
内容の分割……………	135
分量の分割……………	136
第7節 短く要領のよい文章……………	137
頭の整理……………	137
重点ピック・アップ……………	138
抽象化……………	138
第8節 人を感動させる文章……………	139
感動させない文章……………	139
人柄の訴え……………	140
事実だけを——状況設定・観察眼・取材……………	140
第9節 自分の気持ちや考えを自由に書くには……………	143
柔らかい文章……………	143
モノを言うボキャブラリー……………	144
まず話し言葉で……………	144
第10節 頭の中にあることを文章に整理する……………	145
頭の倉庫探し……………	145
フローチャート……………	146
第11節 書く材料を探したり、集めたりする……………	147
ふたたび取材の大切さ……………	147

第8章 文章クリニック—間違えやすい文と語句

第1節	文章の間違い	149
第2節	つつしみたい表現	167
第3節	間違えやすい語句	169

付録 ビジネスマンの文章心得

第1節	ビジネス文章の特徴と意義	173
第2節	四つのタイプと四原則	176
第3節	ビジネス文章クリニック	183

主な参考文献	189
索引	191
おわりに	195

新版 だれも教えなかった

レポート・ 論文 書き分け術

麗澤大学名誉教授
元産経新聞論説副委員長

大竹 秀一 著

第1章 文章を書くことが苦手な人に

第1節 なぜ苦手か

●学生たちの嘆き

私は新聞社で記者生活を30年あまり送ってから大学に転じ、学生たちに文章の書き方を指導する授業を14年にわたって担当した。

新聞社時代は社会部記者、論説委員などとして、主にニュース記事や連載企画記事、社説などを書いてきたが、そういう記事の書き方を、マスコミ専攻でもない学生たちに教えるわけにはいかない。そこで自分の授業の方針を決めるために、毎年春の学期始めに、教室に集まってきた学生たちにアンケートを実施してきた。学生は文章を書くことについてどのような思いを持ち、何を求めて私の授業を受けようとするのかを知りたいと思ったのである。

アンケートでは、これまで高校などでどんな作文教育を受けてきたのか、大学ではどんな文章を書かされているか、この授業に何を期待しているか、文章を書く上でどういうところが難しいか、等々について質問項目に答えてもらったあと、「文章と私」という題でショート・エッセイを書いてもらうことにしていた。

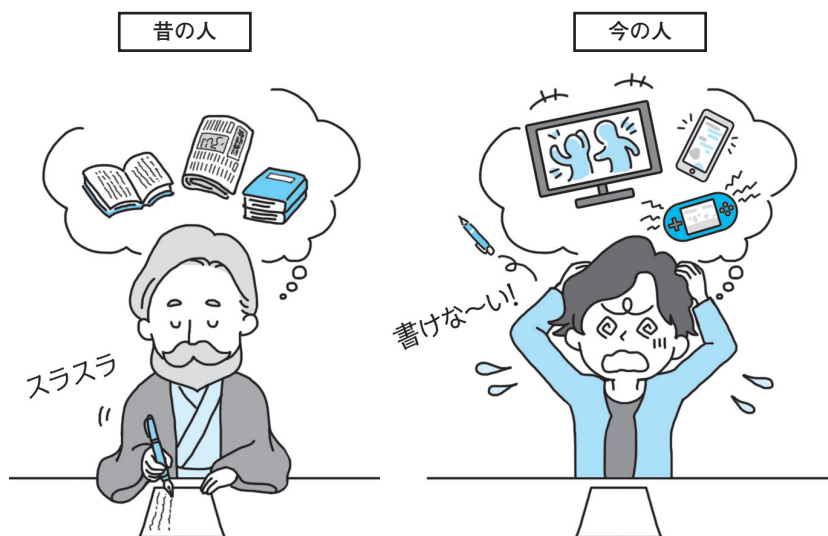
そこには学生たちの文章に対する思いがストレートに語られていて、興味深く、教えられることが多い。

「小学校の時から作文は大の苦手だった。私は活字離れで、語い(彙)も貧しい。書けと言われても何をどう書いてよいかわからず、頭の中がパニックになる」というのがある。

「手紙や日記を書くのは大好き。自分が体験したことを細かく書く

ことはできるけれど、大学入試の小論文のように人を納得させる文章は難しく、うまく書けなかった」と、体験を語ってくれたものもある。

「大学ではレポートが多くて困っている。書き方がわからなくてレポート書きの本を読んできたが、いざとなるとやっぱり書けない」というのは、学生として今突き当たっている大きな悩みの告白である。



第2節 その理由は

●深刻化する活字離れ

若い人たちの作文能力が低下してきているということは、戦後この方ずっと言われてきたことだ。私の経験からしても、全体的な傾向としては確かにその通りで、作文能力の低下は争えない事実だと思わざるを得ない。

それにはそれなりの理由がある、と私は考える。昔はメディアといえは書き言葉、すなわち文字が最有力で、ニュースを知るには細かな活字のぎっしり詰まった新聞を読み、身近な楽しみごとといえはこれまた活字づくめの小説や読み物しかないというわけで、人々は否応なしに活字に親しんでいた。勢い、読むだけでなく、文章を書くセンスといったものも、知らぬ間に磨かれていたと思われる。

ところがその後、テレビをはじめとする視聴覚メディアの開発、普及がめざましい勢いで進み、コミュニケーションが格段に便利で多彩になった反面、若い層を中心に活字離れという事態が生じてしまった。それは年とともに深刻化しているようにみえる。

現代では、ニュースを知るにもスマホやテレビに頼り、気晴らしや楽しみごとにもスマホやゲームなどに頼るというふうで、映像と耳から入る話し言葉が文字に取って代わっている。本の世界にも視聴覚文化が入り込み、電子を含めマンガ本やマンガ雑誌が花盛り。そこではストーリーも、文字による細やかな描写や説明の代わりに、連続したコマ絵と、“吹き出し”に入った短いせりふ、感嘆詞や擬音だけで手早く進行する。面倒な長い文章はいらない。若者たちは、素早く、ページに対角線を引くように目を走らせていく。読むより見る時代なのだ。さらにスマホ万能の時代に入って、知り合いに手紙を書くなどということもほとんどなくなった。

若い人たちは、文章を書かなくてもほとんど支障を感じない環境で

生きている。用のないものは相手にされない。文章を書くのが苦手になるのも無理はない、ということになる。

とはいっても文字や文章は、目に見えないところであらゆる文化の土台になっており、視聴覚文化も底辺では文字に支えられている。手紙に代わって電子メールが幅をきかせる時代にもなっている。だから文章を書くことが苦手だといって済ませるわけにはいかないのである。若い人もサラリーマンになれば、会社の仕事の中でさまざまなレポートを書かされる。学生の勉強にもレポートや論文が付きものだ。入試でも近年は小論文を課すところが増えている。若い人の間から「文章が書けなくて困る」という声が絶えない裏には、そういう事情があるのである。

●学校で教えてくれない

文章を書くのが苦手という人が多い理由にはもう一つ、日本の教育の問題もあるようだ。小、中、高校を通じて一番授業時数の多かった科目は「国語」ではないか。それほど勉強してきたはずなのに、文章が書けないとはどういうことなのか。「国語」の授業では、単語を覚えたり、文章を読んだり、解釈する方に重点が置かれて、手間のかかる作文はないがしろにされているのではないかという疑問をぬぐいきれない。

また、作文の授業といえはだれにも覚えがあるように、遠足や運動会、学芸会など学校行事の思い出とか、日常生活体験などを書かされたことがあるに違いない。「自分が思ったことやしたことを、素直に、正直に書いてみましょう」などと先生から言われなかったらうか。こうした体験重視の指導方法は、作文の初歩の段階ではごく自然で、理にかなったやり方であろう。

しかし、いつまでもこういう世界から抜けきれないでいると、作文能力の進歩は望めない。レポートとか論文などという、物事を調べ、

論理的に考えて書く文章は全く書けないということになりかねないのである。

学年が上がるにつれて、自分の体験から離れ、物事を客観的にとらえる文章を書くということが、今の学校教育では十分に教えられてはいないのではないか。いや、小学校や中、高校ばかりに文句を言っではいられない。日本の大学では昔から、作文の授業は正規のカリキュラムに入れないのが普通で、レポートの書き方も論文の書き方も、ほとんど教えてこなかったのである。

英米の作文の教科書を見ると、「アカデミック・ライティング」といって、レポートや論文の書き方の基本が実に懇切に書いてあるのに驚かされる。日本はこの点で海外の先進諸国に大きく後れを取っている。

このような作文教育の不在、あるいは不満足な大学や専門学校（専修学校）を出て就職しても、職場で文章を書けないことに悩んでいる若者が多いであろうことは、怪しむに足りない。サラリーマンになっても、自社の商品の売れ行き調査、新商品開発のための調査等々で報告書（レポート）を書くとか、稟議書やビジネス手紙文を書くなど、文章を書かなければならない場合はけっこう多いのである。

というわけで、文章を書くことに対する苦手意識の背景は奥が深い。あなたの悩みは必ずしもあなただけの責任ではないことがおわかりいただけたと思う。では次に、若い人はどういう文章を苦手に行っているのか、文章書きのどういうところに難しさを感じているのかを、もう少し詳しく、具体的に見てみることにしよう。あなたの悩みと比べてみてほしい。

第3節 どこが苦手が

● アンケートの回答

先に述べた学生たちへのアンケートで、私は「作文の授業に何を期待するか」を聞いてみた。項目を七つ挙げて、該当すると思うものに○印を付けてもらう複数回答方式である。平成12年から15年にかけて四回にわたり、回答してくれた学生は合計316人。私の授業の受講資格は2年生以上だったので、2年生が半数以上、残りは3、4年生である。その結果は次の通りであった（アンケート結果は『麗澤大学紀要』第76巻に発表したもの。％は該当項目に○印を付けた学生の割合を示す）。「授業に期待するもの」は、「苦手とするもの」とほぼ同じと考えてよいだろう。

表1-1 作文の授業に期待するもの

1	大学で課せられるレポートや論文の書き方	75.3 (%)
2	全般的な作文能力の向上	69.9
3	就職試験で課せられる作文や小論文の書き方	59.8
4	職場で要求されるビジネス文章の書き方	38.0
5	文学的な表現能力の錬磨	25.0
6	手紙の書き方	22.2
7	その他	1.6

同じアンケートで「文章を書く場合、どういうところが難しいか」も聞いた。その結果を次に挙げてみる。

表1-2 文章書きの難しいところ

1 論理的に筋道の通った文章を書くこと	67.1 (%)
2 説得力のある文章を書くこと	61.4
3 論文やレポートの形式・書き方	44.9
4 レトリック（修辞）など文章の表現力	44.3
5 書き出し	42.7
6 頭の中にあることを文章に整理すること	42.4
7 漢字や熟語、語彙などの知識不足	41.8
8 長い文章を書くこと	38.9
9 短く要領よく書くこと	32.3
10 人を感動させる文章を書くこと	29.4
11 自分の気持ちや考えを自由に書くこと	25.9
12 締めくくり	25.3
13 書く材料を探したり、集めたりすること	13.6
14 原稿用紙、レポート用紙にどう書くか	8.9
15 その他	4.1

以上の結果から、大学生が文章を書く上で何を苦手とし、どんなところを難しいと感じているかがだいたいわかる。なお、これについての対策は、あとで章を改めて述べることにする。

●レポート・論文—アカデミックな文章

〔表1-1〕のアンケート結果でわかるように、学生の希望が一番多いのは、「レポートや論文の書き方」であった。ほぼ4人のうち3人がそれを求めている。また、〔表1-2〕を見ると、文章を書く上で難しいと思うことの第1位は「論理的に筋道の通った文章を書くこと」、第2位は「説得力のある文章を書くこと」、そして第3位は「論

文やレポートの形式・書き方」という結果であった。この三つはどれもレポートや論文書きのキーポイントとあってよいものである。

これらを総合すれば、学生たちの多くがレポートや論文書きを苦手に行っていること、またこれらを書く上で、具体的にどういう点に困難を感じているかがわかる。レポートや論文は大学では否応なしに書かされるものだ。先生に言われて提出しなければ、合格点をもらうことはおろか、単位を取ることも覚束ない。卒業論文が必須の学部では、書かなければ卒業ができないのだから、みんな必死になるのも当然である。専門学校（専修学校）などでも事情は似ているのではないか。

このような、大学や専門学校で勉学の一環として書かされる文章を、私はとりあえず「アカデミックな文章」と呼んでおこう。これをいかに攻略するか。これが本書の目標の一つである。アカデミックなどというと、ひどく難しいもののように感じるかもしれないが、別に恐れることはない。これは書き方の決まりや定型ができており、それに当てはめていけばよいので、そういう意味では書きやすいともいえるのである。

● 社会の文章 —ノン・アカデミックな文章

もう一度アンケートにもどって、〔表1-1〕の結果を見てみよう。学生たちが期待するものを文章の種類ということで見ていくと、1位の「レポートや論文の書き方」の次にくるのは3位に挙げられた「就職試験で課せられる作文や小論文」、続いて4位の「職場で要求されるビジネス文章」、6位の「手紙」である。その間に2位の「全般的な作文能力の向上」や、5位の「文学的表現の錬磨」など文章書きの技法に関するものが入っている。

就職試験の作文・小論文や職場のビジネス文章、手紙などの書き方は、本来、大学や専門学校などの正規の教育には関係のないものだ。

このうち職場のビジネス文章は経営学部とか商学部などの授業で、

また就職試験の作文・小論文は一部の希望学生への課外サービスなどとして、実際に指導しているところがあるかもしれないが、一般にはカリキュラム外のものと見てよいだろう。ところがこれらに対する学生たちのニーズはけっこう高い。学生にしてみれば、大半は卒業後すぐ就職するつもりなので、関門の就職試験を気にするのは当然だし、就職後のビジネス実務に関心を寄せるのもわかるというものである。

ところで、就職試験で書かされる文章とか、ビジネス文章、手紙文といったものは、前に見たような大学、専門学校などで学生が書く文章とは種類の違う文章なのである。レポートとか論文とか、同じ言葉で言っているけれども、内容に違いがあり、文章の性格も違うのである。このことをしっかりとわきまえておく必要がある。先に挙げた学生が書くレポートや論文が「アカデミックな文章」なら、こちらは「ノン・アカデミックな文章」であり、「社会の文章」ということになる。

では、この二つはどこがどう違うのか。それはあとでゆっくり述べることにしよう。ともかく、学生の立場で文章というものを考えると、学生として書かなければならない「アカデミックな文章」と、社会に出るところで、あるいは出たあとに書くことになるノン・アカデミックな「社会の文章」の二つに分けられる、ということをおきたいのである。そして、学生たちはこの両方に自分の能力の不足を感じ、できればそれを高めたいと思っている。

ところが、これまでに出版されたレポートの書き方とか、論文の書き方という本は、すべてとってよいほど、どちらか一方のレポートなり論文の書き方をコーチしてくれるもののように見受けられる。しかし、両方に目配りした書き方指導の本があってもよいのではないか、というのが私の本書執筆の立場である。

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

文章を書くことが苦手な人に

第2章

文章の分類
—主観的文章と客観的文章—

第1節 富士山の書き方

文章を書こうとするとき、一番先に考えなければならないのは、何の目的で書くのかということである。その目的に応じてさまざまな文章の種類分けが生じ、型の違いが生まれる。そのことをこれから説明しよう。文章を書く前の、肩慣らしのトレーニングのつもりで読んでほしい。

文章はそもそも個人が書くものである。つまり書くということは個人の表現活動にほかならず、その限りでは書き手と文章とは切り離すことができない。しかし、書く人の立場に立って、書く対象は何かを考えてみると、文章は大きく二つの種類に分けることができる。ごく簡単に言えば、自分が見聞きしたり、感じたり、考えたことを自分の側から書く**主観的文章**と、自分の外にある物事を客観的に書く**客観的文章**である（ワン・センテンスの場合は、それぞれ**主観文**、**客観文**と呼ぶことにする）。

そんな文章の分け方は聞いたことがない、というかもしれない。しかしこれは勉学の途上にある学生諸君にはとりわけ大切なことなのだ。例えば、レポートや論文などを書くときは「事実と意見」を分けて書けといわれる。さてどのように分けて書けばよいかというときに、主観的文章と客観的文章の区別を心得ていると理解しやすい。事実とは自分の外にあるから客観的文章で書くもの（自分のことでも、切り離して考える）、意見とは自分のものだから主観的文章で書くもの、と考えればよいのである。

主観と客観はどう違うかとか、事実とは何かといったことは、厳密

に突き詰めて考えようとするとうかがえなくなる。哲学や論理学の大問題かもしれない。しかしそうした本質論はさておき、今、私たちは文章を書く上での一つの方便として、そういう区分けをしてみると有効だといいたいのである。

以上ご了解いただいた上で、主観的文章、客観的文章のそれぞれを次のように定義しておこう。

【定義】

主観的文章 自分の立場で書いた文章。物事を主観的に述べた文章である。主観的とは、自分の感性や感情、想像などに依拠しているということ。さらに物事についての自分なりの判断、認識、見解、意見、提案なども含める。

客観的文章 第三者の立場で書いた文章。事実あるいは真実について客観的に述べた文章である。客観的とは、事実または真実であることをみんなが認めるだけの根拠、裏付けがあるということである。

理屈だけではわかりにくいかもしれない。下に具体例をいくつか挙げてみよう。どれも同じ富士山について書かれた文章（または文）である。それぞれ主観的文章（または主観文）か、それとも客観的文章（または客観文）か。なぜそう言えるか。考えてみてほしい。

【文例2-1】

富士山は標高 3776 メートル、静岡県と山梨県の県境に位置する日本で一番高い山である。

地理の教科書か、辞書にでも書いてありそうな文である。これは主観文か、客観文か。こう問われたら、おそらくだれでも客観文と答えるに違いない。その通りである。「富士山」という第三人称の言葉を主語にしているし、書いてあることはその高さや位置などという客観的な事実である。

では、上記の定義に照らして、「事実または真実の客観的な根拠、裏付け」はどうか。まず標高3776メートルということは、だれか知らないが国土地理院あたりの測量の専門家が実際に測って、間違いないと公に認められており、地図にも記入されている。静岡、山梨県境にあることも地図で明らかだし、県庁に聞いてもよし、何なら地図を片手に出かけて行って確認すればよい。

こうしたことは日本人の常識で、だれも事実であることを疑う人はいない。つまり「公知の事実」であって、今さら証明の必要はないのである。というわけで、文例2-1は客観文の条件を全部満たしている。

【文例2-2】

富士には、月見草がよく似合う。

作家、太宰治の小説「富嶽百景」（新潮文庫『走れメロス』所収）の中の有名な一節である。イメージの喚起力がすばらしい。この文は主観文か、客観文か。

考える手がかりの一つは主語にある。主語が「私」の場合は主観文であることが多いが、この文には見当たらない。「月見草」を主語と考えれば、「月見草は富士によく似合う（花である）」と書き換えなければならない。あるいは「富士」を主語にして「富士は月見草がよく似合う山である」とすることもできる。三人称の主語なら客観文ということになりそうだ。

しかし、文の意味を考えれば、これは富士山と月見草の取り合わせについての、作者太宰治の感じ方、感覚を表現した文である。人間の感じ方は人によって違いがあり、客観的事実とはいえない。太宰は富士山に月見草がよく似合うと感じたが、それは太宰の主観であって、人によっては月見草より桜のほうが似合うと感じるかもしれないし、他の人はコスモスがぴったりだということかもしれない。

だから、もし書き換えるとすれば、「私は、富士には月見草がよく似合うと思う」とするのがもっとも適切であろう。これなら文の意味、形式ともに主観文ということになる。

そんな詮索をするより、そもそもこの文は小説という主観的文章の中の一節だから、主観文に決まっているじゃないか、と言われればその通りである。ともかく、文例2-2は太宰が「自分の感性に依拠して、自分の立場で書いた文」だから、主観文の定義に当てはまる。

【文例2-3】

富士山頂で丸い月が輝く「パール富士」が12日午前、菜の花が満開となった神奈川県二宮町の吾妻山公園で観察された＝写真＝。

同県藤沢市の写真家松田巧さん（41）が同日午前6時40分頃に撮影した。

松田さんによると、地元でパール富士を狙えるのは年数回程度。この日は午前4時に起床し、月が沈む約1時間前から公園でシャッターチャンスを待っていたという。松田さんは「寒かったが、いい構図で撮影できた」と喜んでいた。

これは平成29年2月14日の読売新聞朝刊第1社会面に掲載されたニュース記事である。「富士に真珠」という見出しが付き、写真も載っ

ている。記事に書かれたように、白い雪をかぶった富士の山頂にピンポン玉のようにまん丸い月が載っかっているように見える。ピンポン玉を真珠に見立ててパール富士というのだろう。

この記事は徹頭徹尾、客観文で書かれている。ニュース記事は新しい出来事、珍しいことなど客観的事実を伝えるものだから、客観文、客観的文章で書くのが基本になっている。記者はそのためにこの写真を撮影した松田さんという人から取材している。いつ、どこで、はもちろん、松田さんの氏名、年齢、職業から撮影の苦心談、うまく撮影できた喜びの声まで聴き出している。

このようにニュースという人の知らない事実について書くときは、事実であるという根拠、裏付けを示さないと、読者に信用してもらえないのである。その点が同じ客観文でも【文例2-1】のように公知の事実を書いたものと違うところだ。

【文例2-4】

3月12日午後1時11分、国会において首相演説の真っ最中に、宝永火口の真下、海拔2500メートル付近の山腹からはじまった富士山の大噴火は、まず南東麓2702メートルの高さにある側火口である宝永山を吹きとばし、つづいて、御殿場方面へかけて山腹にそって次々に大小20数個の火口が開き、一斉にガスを噴き出し、灰と火山弾をとばしはじめた。宝永4年(1707年)の大噴火以来、実に二百数十年ぶりに富士休火山は大活動をはじめたのである。

この文章は一見したところ、データがぎっしり詰まっていて、新聞のニュース記事に似ている。全体が客観的表現のスタイルで書かれているが、私たちは江戸時代の宝永4年この方、富士山大爆発という

ニュースは聞いたことがない。ヘンだなと思うのも当然、実はこの文章はフィクションなのだ。SF作家、小松左京の『日本沈没』（光文社文庫・下巻）に出てくる一シーンである。

小説の中には、客観的事実が事実として書かれる場合がないではない。しかし一般的に言って、小説は作者の想像、空想の産物であって、基本的には主観で書かれたものである。「見てきたような嘘を言い」というが、事実でないことをいかに事実らしく思わせるかが、作家の腕の見せ所といってもよいだろう。この文章は、主語が第一人称ではないけれども、また全体として客観的文章のスタイルをとっているものの、その文章の成り立ちを考えれば作家、小松左京が想像力を駆使して書いた主観的表現の文章であることは疑いない。このように、客観的文章と主観的文章の違いは、外見や形式だけで判断するわけにはいかない。だれが何の目的で書いたかを考えなければならないのである。

以上、四つの文例について、主観的文章と客観的文章の違いを見てきた。だいたいおわかりいただけたことと思う。私はこの区別がいろいろの文章を書く上で基本となる大切なことだと言ったが、とりわけレポートや論文などという「事実を大切に扱う文章」「事実と意見を分けて書く文章」では、よくよくわきまえておいてほしいことである。

文章の中には、事実についてのあなた自身の感じ方とか、考え方を述べるものもあるが、そうでないものもあるのだ。対象となる事実がどのようなものなのか、それが重要なことであって、あなたの感じたことや意見などは問題ではなく、書く必要もないという文章もあるのだ。事実が重要視される場所では、できるだけ主観を排して、客観的文章で書かなければならないのである。どのように書くかは、いずれあとの章でくわしく述べよう。